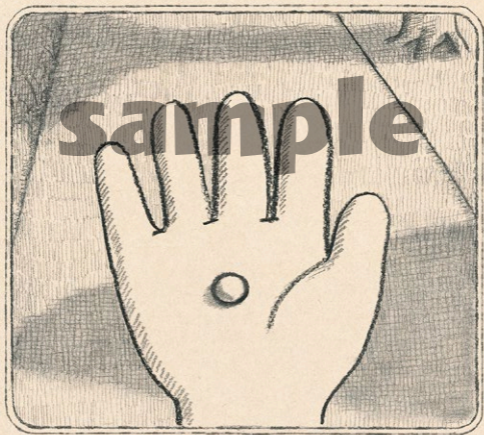


# だいず



作 ひるかわあや



ひとつのサヤの<sup>なか</sup>中に、<sup>みっ</sup>だいずが三つならんでいます。

<sup>ふゆ</sup>冬のかわいた<sup>くう き</sup>空気の朝、<sup>あひ</sup>兄弟<sup>きょうだい</sup>たちがおしゃべりをしています。

「ぼくら、ずいぶん<sup>まる</sup>と丸くなったね」

<sup>ひと</sup>一つ<sup>め</sup>目の<sup>い</sup>だいずが言いました。

「それに、やわらかい<sup>からだ</sup>体の<sup>いろ</sup>色、あわい<sup>き</sup>黄色<sup>いろ</sup>がみごとだね」

<sup>ふた</sup>二つ<sup>め</sup>目の<sup>い</sup>だいずが言いました。

「まったく、<sup>ひか</sup>光り<sup>ほく</sup>かがやく<sup>ほう</sup>宝石<sup>せき</sup>そのものさ」

<sup>みつ</sup>三つ<sup>め</sup>目の<sup>い</sup>だいずが言いました。

<sup>お</sup>起きる<sup>きのう</sup>たびに、昨日<sup>すこ</sup>より少し、りっぱ<sup>き</sup>になっている気がしました。

sample





sample



・・・パチ・・・パチン・・・

「おや、<sup>とお</sup>遠くのほうで、<sup>なに</sup>何かがはじけるような音<sup>おと</sup>がしないかい？」

<sup>ひと</sup>一つ目の<sup>め</sup>だいずが、<sup>みみ</sup>耳をすませました。

「なるほど、時々<sup>ときどき</sup>小さくパチッというね」

<sup>ふた</sup>二つ目の<sup>め</sup>だいずが<sup>い</sup>言いました。

「ぼくは、<sup>じぶん</sup>自分が<sup>かた</sup>硬く<sup>ちい</sup>小さくなる<sup>おと</sup>ときの、あの音<sup>おと</sup>かと思<sup>おも</sup>っていたけどね」

<sup>みつ</sup>三つ目の<sup>め</sup>だいずが<sup>い</sup>言いました。

「いや・・・<sup>そと</sup>外から<sup>き</sup>聞こえるな」

「<sup>そと</sup>外<sup>そと</sup>っていうと、<sup>そと</sup>サヤの<sup>そと</sup>外<sup>そと</sup>かい？」

<sup>きょうだい</sup>兄弟<sup>みみ</sup>たちは、さらに<sup>みみ</sup>耳をすませました。

sample





だいでずたちは、硬いサヤの中で、少しずつ大きくなります。サヤの外へ、出たことはありません。

知っていることと言えば、温かいのは、お日さま。プーンというのは、カメムシ。風の音、雨の音、曇りの日、それに朝と夜。サヤの中では、雨でも日照りでも、安心していられました。

「サヤの外で何か、大変なことが起こっているようだ」

「大変なことって、ぼくらが心配するようなことかい？」

「ぼくらが、危険だということ？」

「・・・ああ、ぼくは何だか不安だよ」

丸々とした、だいでずの兄弟たちが身ぶるいをする、かわいたサヤが、カラカラと鳴りました。







すると、その音<sup>おと</sup>を聞<sup>き</sup>いた、だ<sup>だ</sup>い<sup>ず</sup>のお母<sup>かあ</sup>さんが言<sup>い</sup>いました。

「子<sup>こ</sup>どもたち、怖<sup>こわ</sup>がらないで」

「外<sup>そと</sup>の世界<sup>せかい</sup>には、おそろしいこと<sup>こと</sup>なんて、一つ<sup>ひとつ</sup>もありませんよ」

たくさんのサヤ<sup>さや</sup>をつけたお母<sup>かあ</sup>さんが、風<sup>かぜ</sup>に体<sup>からだ</sup>をゆらしませす。

一つ<sup>ひとつ</sup>目<sup>め</sup>のだ<sup>だ</sup>い<sup>ず</sup>が、言<sup>い</sup>いました。

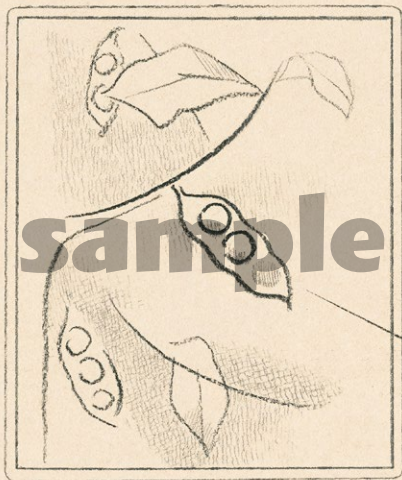
「見<sup>み</sup>えないからって、おそれていたね」

「そうさ、ぼくらはいつでも、完<sup>かん</sup>ぺきだというのに」

二<sup>ふた</sup>つ目<sup>め</sup>のだ<sup>だ</sup>い<sup>ず</sup>が、言<sup>い</sup>いました。

「今<sup>いま</sup>だって、まぶしいくらいに、か<sup>か</sup>がやいてる！」

三<sup>みつ</sup>つ目<sup>め</sup>のだ<sup>だ</sup>い<sup>ず</sup>が言<sup>い</sup>いました。



お日さまが高くのぼるころ、兄弟たちのサヤは、すっかり硬くなりました。

すると、ちぢんだサヤが、音をたてて弾けました。

「パチン！」

大きな音とともに、一つ目のだいずが弾け出て、土の上にポロンと落ちました。

ほかの兄弟は、落ちてきません。

「おやおや！ずいぶん兄弟と離れてしまったぞ」

だいずはお母さんを見あげました。しかし、自分のサヤがどこにあったのか、さっぱりわかりません。

みんな風に吹かれて、カサカサとかわいた音を立てています。

「さて、ぼくは一人で生きてかなきゃならないよ」

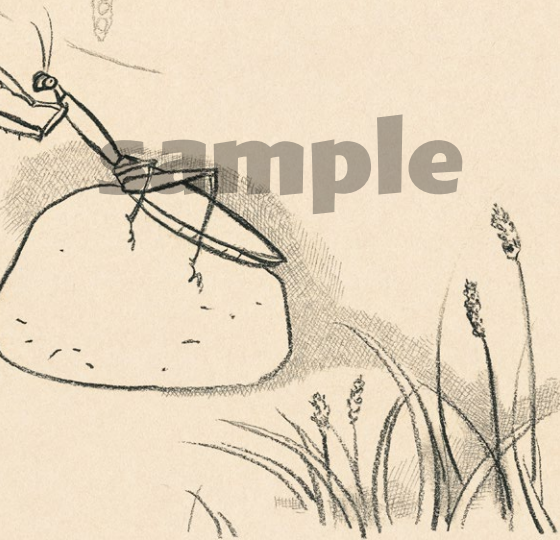


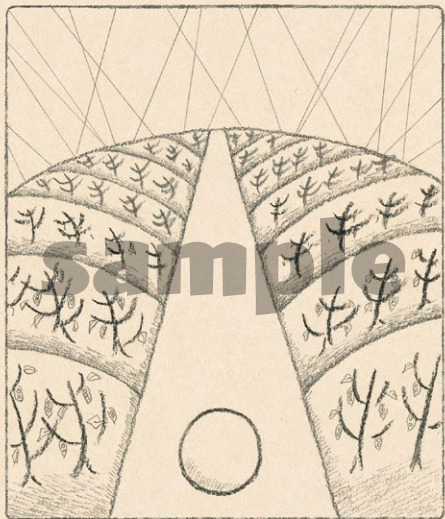
The image features several pencil sketches on a light-colored background. At the top, there are two large, oval-shaped objects, possibly seeds or fruits, with some internal texture. To their left and right are several curved lines representing stems or branches, each with small, oval-shaped pods or seeds hanging from them. In the lower half of the image, there are several large, textured, circular objects that look like flower heads or seed heads on stems. A detailed drawing of an insect, possibly a fly or a beetle, is perched on one of these heads. In the bottom right corner, there is a small, dark, circular object. The word "sample" is printed in a bold, sans-serif font across the middle of the image, overlapping the sketches.

sample

はじめて見るサヤの外は、たくさんの色や形に、  
あふれていました。

お日さまの光りで、虫や花たちが、キラキラと  
踊っています。見るものすべてがとても大きく  
て、だいたいは目を丸くして眺めました。





そして、あることに気がつきました。

「外の世界でも、こんなに丸くて美しい、すてきな色のものは見あたらない。ぼくは、ほんとうに宝物のようだぞ」

だいず畑のあちこちから、サヤの弾ける音が、パチパチと聞こえてきます。

だいずは、たくさんの拍手で見送られているようで、ほこらしい気持ちになりました。

sample





それから、毎日<sup>まいにち</sup>氣<sup>き</sup>の向<sup>む</sup>くま<sup>ま</sup>まに歩<sup>ある</sup>きました。

「ははあ、ぼくがあ<sup>かど</sup>の角<sup>ま</sup>を曲<sup>ま</sup>がると、次<sup>つぎ</sup>の角<sup>かど</sup>が<sup>き</sup>決<sup>ま</sup>ってぼくを待<sup>ま</sup>っているね」

「それに、この石<sup>いし</sup>ころ<sup>こ</sup>を超<sup>こ</sup>えると・・・やっぱり次<sup>つぎ</sup>の石<sup>いし</sup>ころが、ぼくを待<sup>ま</sup>っているんだ」

世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>はと<sup>ひろ</sup>ても広<sup>ひろ</sup>くて、先<sup>さき</sup>っ<sup>ま</sup>で来<sup>き</sup>たか<sup>な</sup>？<sup>おも</sup>い<sup>う</sup>と、ま<sup>だ</sup>ず<sup>つ</sup>と、先<sup>さき</sup>の先<sup>さき</sup>まで<sup>つづ</sup>続<sup>つづ</sup>いて<sup>い</sup>ます。

sample





くるまどおの多いみちをさけて、こうえんへやってきました。

「今日は、どこでねようかな」

夕日をあびただいずの影が、長くのびています。

「わあ、いいもの見つけた！」

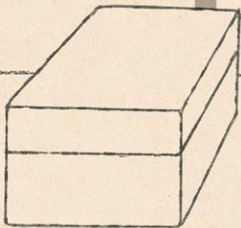
一人の男の子が、立っていました。

だいずをヒョイとつまみあげると、手のひらにのせて、コロコロと転がします。

それから、急に何か思いついたように顔をあげると、走って家に帰りました。

「ただいまー」

机にあった四角い箱をあけると、だいずをポツン、と入れました。





**sample**



箱の中はこ なかには、石いしや小枝こえだ、木きの実み、ガラスのかけら、ビー玉だまが入はいっています。

「へえ、今日きょうのねどこはここだね」

だいずは薄暗うすぐらさに目めを細ほそめながら、言いいました。

「いらっしゃい。あなた、あたらしい仲間なかまね」

だいずより少すこし小ちいさな赤あかい実みが、話はなしかけてきました。

「やあ、赤あかい色いろがとてもきれいだね。・・・ところで、ぼくは何なんの仲間なかまになったのかなあ？」

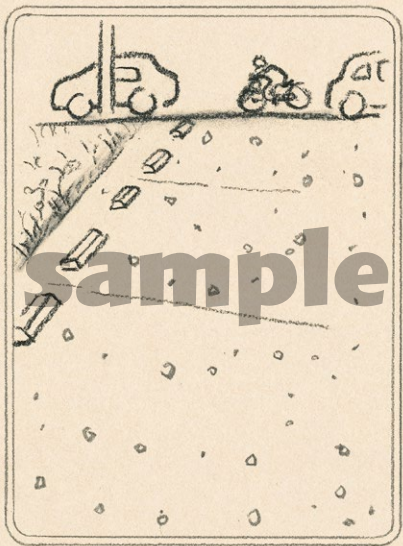
すると赤あかい実みは、ほんのり色いろを明あかるくして、答こたえました。

「この箱はこはね、彼かれの宝物たからもの入れよ。彼かれのお気きに入いりだけが、ここへ入いれてもらえるの」

「彼かれ」というのこは、だいずをひろった子どもこのことです。

それを聞きいただいだいずは、飛とびあがりそういになって、言いいました。

「どうしてぼくが、宝物たからものだってわかったんだろう！」





すると、誰かが答えました。

「子どもってやつは、とくべつなんだ」

「何がすてきなものか、よく見えるし、知っているのさ」

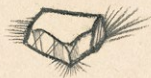
そう言ったのは、淡い水色の、ガラスのかけらでした。ガラスの中には小さな気泡が見えます。

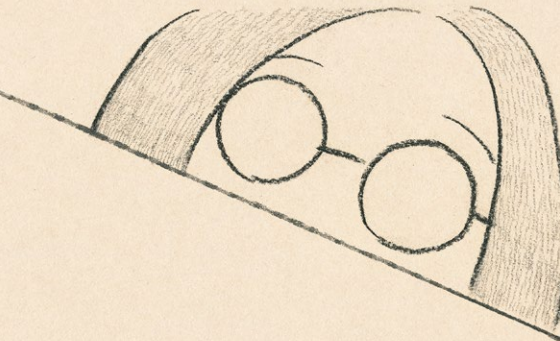
「はじめ、おれは駐車場にまかれた、ジャリの中のひとつだった」

「ところが彼は、おれを見つけ出したんだ。とてもたくさんの、似たようなものの中からね」

だいずは、大きくなずきました。

夕日に照らされて、オレンジ色にかがやくだいずを見つけたとき、彼はドキドキしたにちがない、と思いました。





# sample

箱が、カタンとゆれました。

子どもと、その母親がのぞいています。

「ほら、ピー玉よりも小さくて、どの石よりも、丸いでしょう？」

そう言って、だいずを指さしました。

すると、母親が言いました。

「あら、だいずじゃない」

「これはね、食べられるんだよ・・・そうだ、明日のスープに入れてみようか？」

「すごい、すごい！ぼくが食べるんだからね！」



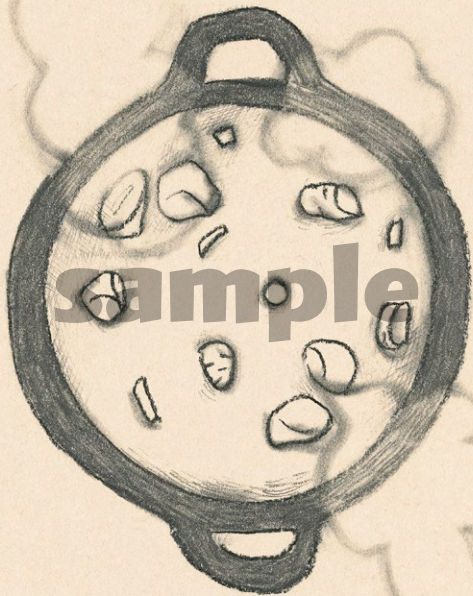
# sample

ははおや  
母親が、だいずをつまみあげました。

どうやら、みんなとお別れのようです。

たからものなかま  
「宝物の仲間たち、さようなら！」

「でも、食べるって何だろう？」



台所<sup>だいどころ</sup>では、ジャガイモやにんじんが、お湯<sup>お湯</sup>にひたっています。  
母親<sup>はは</sup>は、なべの中にポチャンとだいず<sup>な</sup>を入れました。

「ふう、温<sup>あたた</sup>かくて気持ち<sup>きもち</sup>がいいね。食べる<sup>た</sup>って、お風呂<sup>ふろ</sup>に入ること  
かな」

だいずは、心<sup>こころ</sup>も体<sup>からだ</sup>も、フワフワとしてきました。

「ふふふ・・・違う<sup>ちが</sup>違う<sup>ちが</sup>。食べる<sup>た</sup>って、人間<sup>にんげん</sup>になることだよ」  
さわやかな香り<sup>かお</sup>がします。にんじんが、ゴロリと横<sup>よこ</sup>になって言<sup>い</sup>  
ました。

「人間<sup>にんげん</sup>になる？」

「うん、人間<sup>にんげん</sup>の体<sup>からだ</sup>になるよ」

言<sup>い</sup>われてみると、あれほど硬<sup>かた</sup>かっただいず<sup>からだ</sup>の体<sup>からだ</sup>が、少<sup>すこ</sup>しずつ、柔<sup>やわ</sup>  
らかくなっています。人間<sup>にんげん</sup>になる準備<sup>じゅんび</sup>でしょうか。

「彼は<sup>かれ</sup>、ぼくを食べ<sup>た</sup>ると言<sup>い</sup>ったよ。ぼくは、彼<sup>かれ</sup>になるんだね？」

「うん・・・そのとおりだよ」

にんじんが、眠<sup>ねむ</sup>たそうに答<sup>こた</sup>えました。

だいずは、考<sup>かんが</sup>えただけで、ワクワクしてきました。

彼<sup>かれ</sup>の目<sup>め</sup>で、世界<sup>せかい</sup>を見<sup>み</sup>られるのです。彼<sup>かれ</sup>の目<sup>め</sup>で、木<sup>き</sup>の実<sup>み</sup>や、ガラス  
の宝物<sup>たからもの</sup>を見<sup>み</sup>つけるのです。

「ああ、きつと毎日<sup>まいにち</sup>すてきなこと<sup>こと</sup>でいっぱいだよ！とても楽<sup>たの</sup>しみだ  
なあ！」

だいずは温<sup>あたた</sup>かいお湯<sup>ゆ</sup>の中<sup>なか</sup>で、ぐっすり<sup>ぐっすり</sup>と眠<sup>ねむ</sup>りました。



次の日、スープには柔らかくふくらんだ、だいずがありました。  
色はそのままですが、長い丸の形になっています。

「いただきます」

子どもは、スープの中からだいずをすくうと、不思議そうにながめます。

それから、パクリと口に入れました。

だいずは、子どもになりました。

sample



「行ってきまーす」

子どもは今日も、外へあそびに出かけます。

「おっと、地面がすごく遠いね」

だいずは、おどろきました。

子どもが立ちあがると、地面がずっとずっと、下のほうに見えるのです。

目の前には、空が広がっていました。

「わあ、お日さまがとても近いよ。それに・・・なんてよく見えるんだろう！」

そこには、石ころや、草のような、目の前をさえぎるものがありません。

sample



子どもは、手足をふって、グングンと進みます。

だいが一日かけて歩くところを、あつという間に、走りぬけてしまいました。

「よし、この道を行こう！」

世界の先っぽが、すぐにでも見られそうです。

「ふふふ・・・」

かすかに、にんじんの声が聞こえました。

# sample



いしだえほん No.0134

# だいず

2019年5月24日 初版発行

作 ひるかわ あや

印刷・製本・発行 石田製本株式会社

〒063-0836 北海道札幌市西区発寒16条14丁目3-31

TEL 011-676-4520

<http://i-bb.co.jp/>

©2019 Aya Hirukawa / Ishida Bookbinding

※本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。

また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

盗丁・乱丁はお取り替えいたしますので、弊社までご連絡ください。

ISBN978-4-909939-33-3

石田製本の直販サイト「いしだえほん」にて、  
シリアスな物からシュールな物まで、楽しい絵本が続々発売中です！  
<http://p-books.jp/ehons/>

**sample**

ISBN978-4-909939-33-3

C8771 ¥1200E

定価：本体1,200円+税



9784909939333



1928771012000

# sample

